

# 両親が青年のレジリエンスに及ぼす影響の検討

——両親間の親和関係と両親からの支持的関わりとの関連から——

15001PCM 青山 沙弥佳

## I. 問題・目的

青年期は養育者を客観視し始め、養育者を自分の両親であると同時に、夫婦のモデルとして認知する時期とも考えられる(川島他, 2008)。若原(2003)は離別、死別という外的要素よりも、両親・親子関係そのものに対して青年がどう認知しているかという視点で扱うことが重要としている。大島(2013)は、両親の夫婦間の信頼感は相互に影響を及ぼしながら、両親各々の子への支持的関わりに影響を与えていることを明らかにした。小花和(2004)は、子どものストレス反応の軽減とレジリエンスの育成という点からも、母親にとってのパートナー(主として父親)が果たす役割の重要性を指摘し、父親と母親の関係も重視されると示唆している。また、母親が子どもと日常的に関わろうとすることは、男女に関係なく、大学生のレジリエンスを高める可能性があることも示唆されている(浅賀他, 2006)。そこで本研究では、青年が認知する両親間の親和関係と両親各々からの支持的関わり、レジリエンスへの影響について検討することを目的とする。

## II. 研究1

### 1. 目的

質問紙調査によって、以下の仮説を検討する。両親間の親和性が高い者は、両親各々からの支持的な関わりも多い(仮説1)。両親間の親和性が高い者は、レジリエンスも高い(仮説2)。両親各々から支持的な関わりを受けている者は、レジリエンスも高い(仮説3)。

### 2. 方法

調査対象者と手続き：2016年7月にA大学の授業時間内の一部で質問紙を配布し集団で実施した。有効データ数は184名(男性63名、女性120名、不明1名)であり、平均年齢は19.81歳であった。

質問紙：両親間の親和関係尺度、父親・母親からの支持的関わり尺度、レジリエンス尺度、フェイスシート、面接の依頼で構成された。

### 3. 結果と考察

因子分析の結果、両親間の親和関係尺度は2因子、レジリエンス尺度は3因子が抽出された。父親・母親からの支持的関わり尺度は主成分分析で1因子性を確認した。性差を検討するためにt検定を行ったところ、両親からの支持的関わりは女性の方が男性よりも有意に高かったことから、重回帰分析(強制投入法)は男女別に行った(図1, 図2)。仮説1は一部支持されたが、「両親不和」である女性は「父親からの支持的関わり」が少ないと捉えていた。仮説2は支持されなかった。仮説3は一部支持されたが、「父親からの支持的関わり」が、男性では「肯定的な未来志向」と「感情調整」に正の影響を示し、女性では「肯定的な未来志向」に正の影響を示した。「母親からの支持的関わり」はレジリエンスに影響しなかった。研究1では日常場面における子の認知を調査したため、実際に体験した乗り越えるのが困難な出来事の時に、両親間の親和性が高い者は両親からの支持的関わりがあったとは限らない。そこで、研究2では個別面接調査を行い、そのような時に両親からの支持的関わりがあったかどうか、あったなら両親からの支持的関わりがレジリエンスに影響していたかについて、両親間の親和関係別に検討することとした。

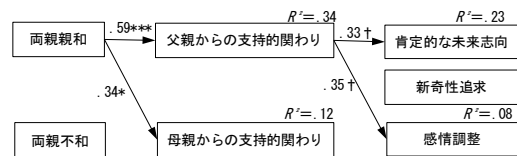


図1 両親間の親和関係および両親からの支持的関わりとレジリエンスとの関連(男性)。

注) \*\*\* $p < .001$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

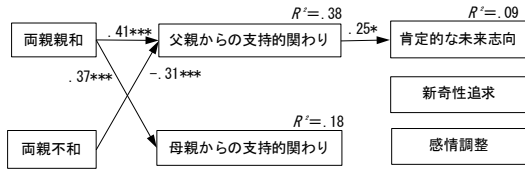


図2 両親間の親和関係および両親からの支持的関わりとレジリエンスとの関連（女性）。

注) \*\*\* $p < .001$ , \* $p < .05$

### III. 研究2

#### 1. 目的

青年期は対人関係も拡大していく時期であり（斎藤，1996），両親以外の他者からの関わりもレジリエンスに影響することが考えられる。そこで，研究1と同様の仮説のもと，実際に体験した乗り越えるのが困難な出来事を尋ね，その時に両親からの支持的関わりがあったかどうか，乗り越えるにあたりどう影響していたかについて，他者からの関わりも加えて，両親間の親和関係別に検討することを目的とする。

#### 2. 方法

**面接対象者と手続き：**研究1の対象者の内，両親が健在かつ婚姻関係が維持されている者のみを対象とし，両親親和群（男性1名，女性3名）と両親不和群（男性2名，女性4名）にあてはまる者を抽出した。平均年齢は21歳であった。A 大学内の心理面接演習室にて，2016年10月—11月に25分程度の面接を行った。

**面接内容：**両親の関係，レジリエンスについて質問し，随時どう思ったかについても尋ねる半構造化面接を行った。

**分析方法：**逐語録をもとに，面接者と心理学を専攻する大学院生2名により，カテゴリを作成，命名した。カテゴリを事例ごとに時間軸上に並べ，関連していると見られた語り同士を，矢印を用いて図示し，両親間の親和関係別にプロセスの共通性を見ることで比較検討した。

#### 3. 結果と考察

乗り越えた者の中で共通性が見られた最終的な人数は，両親親和群が3名，両親不和群が2名であり一般化は困難であったが，プロセスは見出された。困難な出来事の時も，両親が親和的である者は両親からの支持的関わりがあった

と捉え，両親が不和的である者はなかったと捉えていた。また，乗り越えたほとんどの者が，他者からの支持的関わりも受けていたと回答した。乗り越える際に「肯定的な未来志向」や「感情調整」をしていたことから，レジリエンスを有していたと考えられ，両親や他者からの支持的関わりがレジリエンスに影響していたと考えられる。これらのことから仮説が支持されたといえる。

#### IV. 総合考察

男性が認知する両親からの支持的関わりは，日常場面において「両親不和」の影響を受けていなかったが，乗り越えるのが困難な出来事においては，両親からの支持的関わりがなかったと捉えていた点は注目に値する。女性においても，日常場面において「母親からの支持的関わり」は「両親不和」の影響を受けていなかったが，乗り越えるのが困難な出来事の時においては，両親からの支持的関わりがなかったと捉えていた。日常場面におけるストレスフルな出来事であれば，両親からの支持的関わりをあまり期待していない可能性がある。しかし，乗り越えるのが困難な出来事の時には，期待したような両親からの支持的関わりがなかったという残念さが語られていることから，日常場面と乗り越えるのが困難な出来事の時では両親からの支持的関わりに対する捉え方が異なっていたと考えられる。

また，「両親親和」である者は，「母親からの支持的関わり」から精神的健康を介して間接的にレジリエンスに影響を及ぼすと考えられた。「父親からの支持的関わり」はレジリエンスに直接的にも影響を及ぼし，精神的健康を介して間接的にも影響を及ぼすことが示唆されたが，本研究ではどちらであるかを明らかにすることができなかった。今後，両親からの支持的関わりが精神的健康を介してレジリエンスを高めるのかどうかについて，検討する必要がある。「両親不和」である者についても，レジリエンスを高めるプロセスを明らかにするため，他者からの支持的関わりとレジリエンスについて，検討する必要があるだろう。